

鹿児島市歴史景観エリア夜間景観基本計画
概要版

本計画について

歴史景観エリア夜間景観基本計画の対象区域は、景観形成重点地区である「歴史と文化の道地区」を基本とした範囲とする。

歴史と文化の道地区は、歴史と文化の道（国道 10 号の終点にあたる一帯）を中心とする地域で、地区の西側には城山が位置し、南側は照国神社に至る参道（市道照国神社線・国道 225 号）、北側は鹿児島医療センターやかごしま県民交流センターに囲まれており、鹿児島市の中心市街地に位置しているだけでなく、主要官庁施設や文化施設、西郷隆盛の銅像、鹿児島城跡等の多くの史跡や、鹿児島県立博物館、鹿児島市中央公民館などの登録有形文化財が点在しており、鹿児島の歴史・文化・観光の代表的な地域である。

また、鹿児島城跡石垣と調和するように、地元産の自然石（川内石）を用いた石張り舗装の歩道、鹿児島城に対面する小学校の石塀のほか、島津斉彬公が磯庭園内の石灯籠に点灯した史実に由来した幹線道路沿いのガス灯、県立博物館から県立図書館までの区間に設けた親水水路など、これまでに多数の景観施設が整備されている。

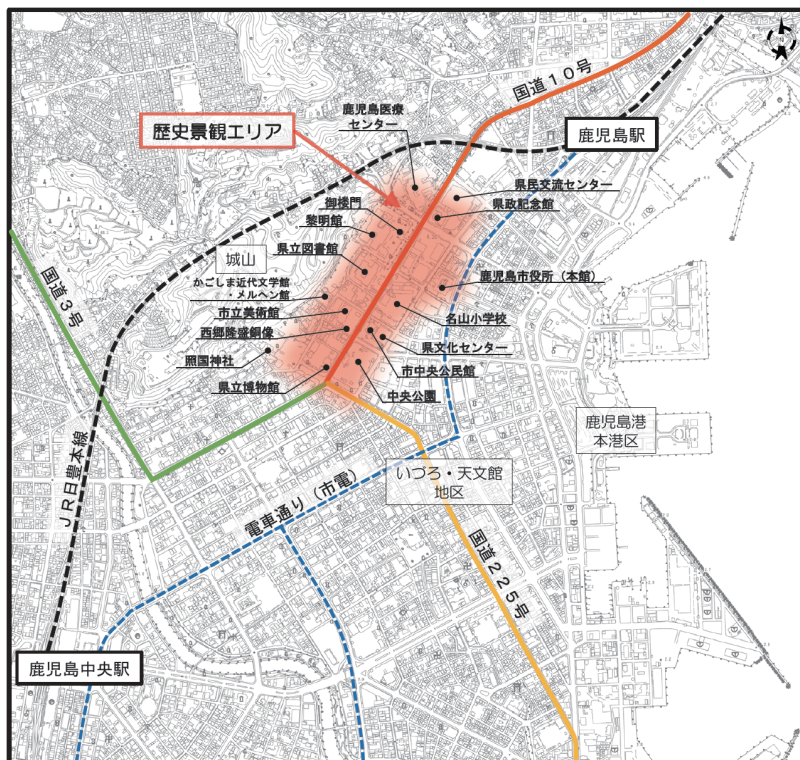
このようなことから、同地区は景観形成重点地区に指定しており、歴史と文化の道地区の歴史、文化、自然がもたらす美しい景観の保全と更なる良好な景観の形成に向けた目標や方向性、ルール等を定める地域として位置づけている。

これまで本市においては、エリアごとの夜間景観に関する計画がなかったため、各所管部局による公共施設等のライトアップ等は局所的な整備に留まっており、面的な連続性や夜間の回遊性が乏しく、夜の観光資源として十分に活かされていない状況である。

本計画は、歴史景観エリアにおいて、市民参加による愛着と誇りが持てる夜間景観の形成及び、観光客誘致を含む新たなにぎわい創出を図るための、ライトアップや街路灯の整備などに関する夜間景観の基本計画である。

なお、まちなか夜間景観形成事業は、第六次鹿児島市総合計画や第二次かごしま都市マスタープラン、鹿児島市景観計画を上位計画とし、実施するものである。

また、その他の関連事業として、にぎわいあふれるまちづくりや回遊性の向上などを図るための中心市街地活性化基本計画及び、歩いて楽しめるまちづくり推進事業とも連携しながら実施するものである。

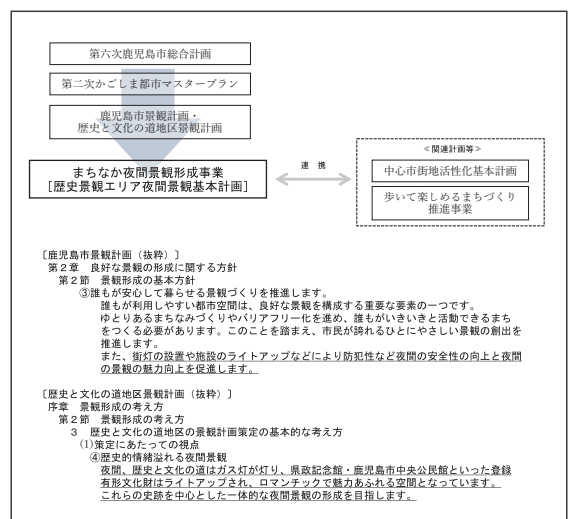


【図】 歴史景観エリアの区域図

国連の持続可能な開発目標（SDGs）は、世界共通の目標として、17のゴールと169のターゲットが掲げられており、本計画では、関連の深い4つのゴールの達成に向けて取り組みます。



【図】SDGs との関連



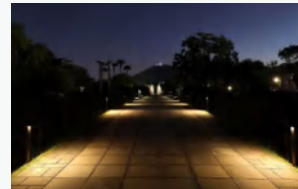
【図】計画の位置づけ

大切にすべき光のルール

心地よく魅力的なまちなかの光環境をつくるために、まずは技術的な視点から光の特徴を理解することが重要である。そこで、本市における夜間景観を検討するにあたり配慮すべき基本的原則を7項目にまとめ、「大切にすべき光のルール」として設定する。

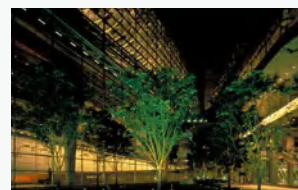
1. 心地よい陰影 - 必要十分な光で、美しい陰影を大切に -

人々が集う場には賑わいと安心感をもたらす明るさが必要だが、憩いの空間には落ち着いた暗さが求められるといったように、機能的に必要な場所と景観要素に対し、それぞれに最適な光をきめ細やかに与えていくことが重要である。
場所と用途に合わせて照明を配置することで、美しい陰影に富んだ魅力的な景色ができる。



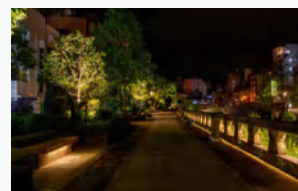
2. まちなみの明るさ感 - まちなみを惹きたて、印象付ける -

わたしたちの感じる「明るさ感」や「快適性」は、視界に占める発光面積に影響されている。建物のファサードや樹木など、視界に入りやすい鉛直面を照らすと、地面を照らすよりも効果的に空間の明るさ感をつくることができる。暗闇に隠れていた空間がめざめることで、安心感と奥行きを感じさせる印象的な夜間景観が形成されていく。



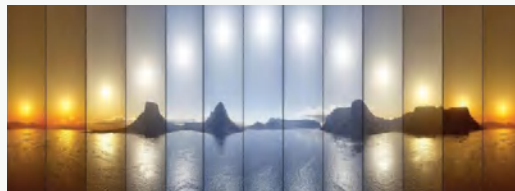
3. グレアフリー - 不快な眩しさを取り除き、目に優しい景色をつくる -

グレアとは、不要かつ不快なまぶしさのことである。目を刺すようなまぶしさの照明器具が目立つことのないように、照明器具の照射方向に注意したり、フードやルーバーによって光源が適切に遮光された照明器具を選ぶことで、グレアの軽減が可能となる。拡散光型の器具の場合は、表面輝度をきちんと管理することが求められる。



4. 適切な色温度 - あたたかみのある明かりを用いる -

空間の印象を大きく左右する色温度の使い分けや統一は、場所や用途に応じて意識することが大切である。例えば、歴史あるまちなみでは低い色温度を用いたほうが、情緒ある雰囲気を惹きたてることができる。



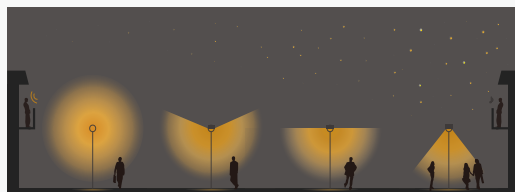
5. 高い演色性 - まちの表情を夜にも豊かに見せる -

光源による色の見え方（再現性）の違いを評価する指標が演色性である。演色性に配慮して照明器具を選定することで、まちなみ、緑、人々の表情といったあらゆるものを色彩豊かに見せることができる。



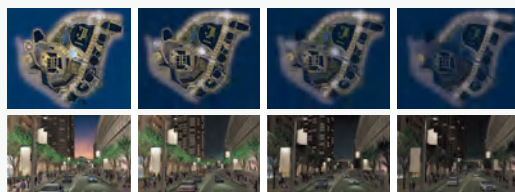
6. 光害への配慮 - 自然の暗さを尊重し、環境や夜空を守る -

無駄な光を周囲に放つと、上空まで漏れた光が星空を見えにくくしてしまったり、自然や周辺の居住環境に悪影響を及ぼすなど、光害（ひかりがい）の原因になる。配慮した照明器具の選定や運用を行うことが必要である。



7. 光のオペレーション - 時間帯や季節に応じて光が変化する -

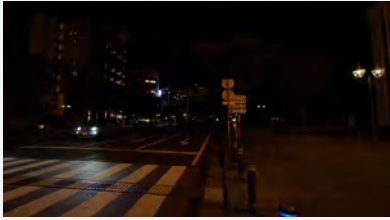
人工光に対しても緩やかで上品な光の変化を計画し、適切に操作することで、自然光のように季節や時間のうつろいを感じられる光環境が生まれる。必要な時間帯と用途に合わせたライトダウン（減灯）を意識することも重要な役割となる。



○現状調査から見えてきた課題点

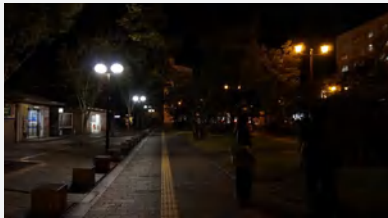
・歩行に不安を感じる暗さ

歩行者にとって足元の明るさが必要なところで暗がりがあったり、路面の照度は足りていても、視界における明るさ感に欠けていて不安を覚える街路が多い。



・統一感のない光

色温度の異なる光源が近くに混在しており、それぞれが打ち消しあっている印象。照らす対象や周辺環境に合わせる意図が感じられず、演色性の低い光源も多く含まれている。



・不快なまぶしさ

過剰にまぶしいと感じる照明器具が多く見受けられ、目に優しい快適な視環境が損なわれている。対比で周囲を暗く感じたり、逆に不要な光漏れが発生しているところもある。



○歴史景観エリアの夜景のキーワード

課題点を改善し、「大切にすべき光のルール」にもとづき夜間景観を形づくることで、訪れる人々が鹿児島県の歴史や文化などの魅力をより堪能できるように、3つのキーワードを定める。

「にぎわいと安心」

…夜の回遊性を高め、いづろ・天文館地区のにぎわいを歴史景観エリアまでつなげる
…回遊動線となっている街路で、安心・安全に歩ける機能的な明るさを確保する

「物語るまちなみ」

…まちに溶け込んでいる歴史や文化の足跡を、あかりで呼び起こし、まちなみが語りかけてくるような豊かな時間を生み出す

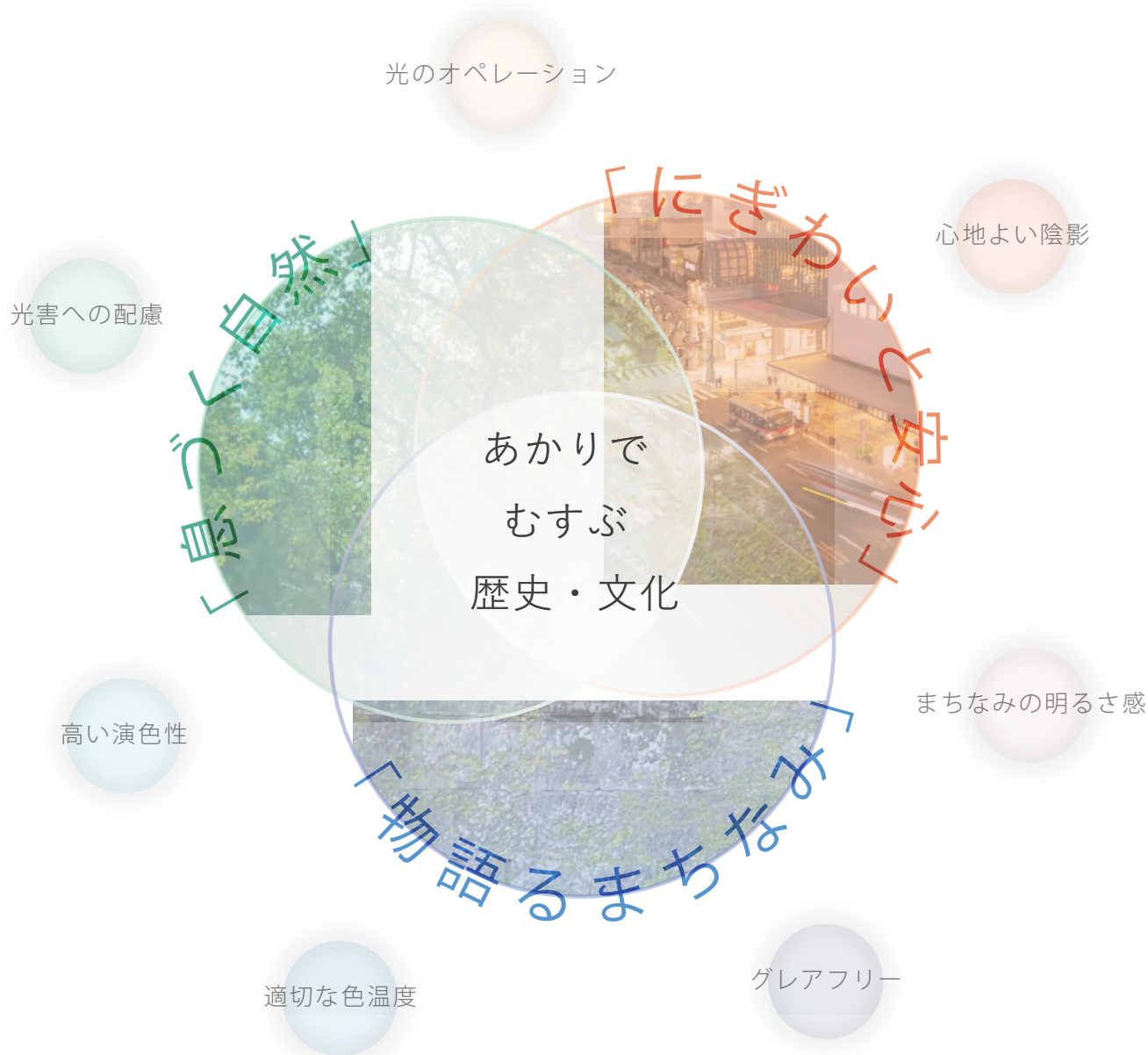
「息づく自然」

…身近にあふれる豊かな自然を、夜にも心地よく感じられるようにする
…環境に配慮した照明により、自然の暗さを守り、未来へ受け継いでいく

○歴史景観エリアの夜間景観形成の目標

- あかりでむすぶ歴史・文化 -

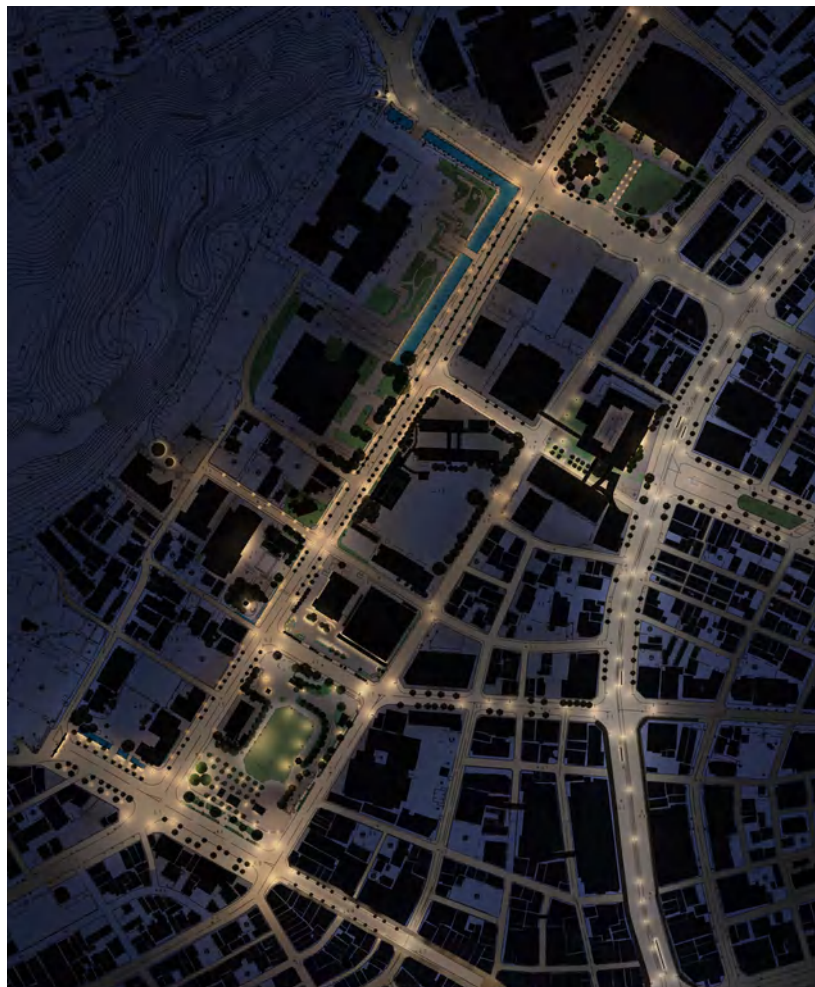
歴史的・文化的なまちなみを活かしてこれまで点で形成されていた夜間景観に対し、統一感があり心地よく環境に配慮したあかりによって、面的な連続性を持たせていくことで、夜間の回遊性向上を図り、よりにぎわいと安心感のある夜間景観を目指す。



地域にとって身近で愛着のある景観を、夜間も魅力的で歩きたくなる空間として創出することで、そこに暮らす人々の生活を豊かにし、訪れる人々にとっても鹿児島県の歴史や文化などの魅力を堪能することができるエリアとするため、光のルールを基盤とする「にぎわいと安心」、「物語るまちなみ」、「息づく自然」の3つのキーワードが交わる先に「あかりでむすぶ歴史・文化」を目標として定める。

○整備の基本的な考え方

現状調査から見てきた課題点を改善し、歴史景観エリアの夜間景観形成目標を実現するため、大切にすべき光のルールに配慮した統一感のあるあかりによる具体的な整備イメージを検討する。



○「大切にすべき光のルール」の適用

心地よい陰影	公共の歩道で1～10ルクス前後、広場や園路で0.5～10ルクス前後、交差点で15～30ルクス前後 ただし明るさ感や周辺環境も考慮して計画する
まちなみの明るさ感	石垣のような景観要素のライトアップや、樹木のライトアップ、建物外壁のライティングを適切に行う
グレアフリー	車道や歩道の街路灯を、グレアに配慮のある仕様とする (カットオフ型やセミカットオフ型の器具の選定、輝度の抑えられたランプへの変更など)
適切な色温度	歴史景観エリアのまちなみを惹きたてるため、 2400～3000K程度の低い色温度で統一する
高い演色性	Ra80以上を基本とする
光害への配慮	照射対象以外への不要な光漏れがないように、 照明器具の仕様（グレアカットフードや適切な配光など）や設置時の納まりに配慮する
光のオペレーション	時間帯によるライトダウンを行い、環境への影響や省エネに配慮する 四季によって照度や色温度の異なる照明シーンを設定する

○整備箇所の検討

本計画における整備では、夜間の回遊性向上を図るため、既存の夜間景観施設と明るさがつながるように回遊動線を想定して整備箇所を選定する。



○ 照国神社線



歴史と文化の道沿いを流れる水路の存在をふちどるように、モデル箇所である県立図書館前と同様の手すり照明を木柵に設ける。

木柵の反対側となる車道側には、グランドウォッシャーと樹木アップライトの二種の照明を一体にしたボラード型の照明器具を、既存の街路樹に対応した配置で設置する。広々とした歩行空間にリズムミカルな光だまりが続き、周囲の街路樹がやわらかくアップライトされることで、その先に歩いていきたいくなるような期待感を備えた奥行きが生まれる。

○ 中央公園



ベンチにもなっている植栽帯のまわりをやわらかく照らすため、ポール上部にスポットライトを取り付けて、高い位置からグレアのない光を与える。曲線的な形状を強調するような光だまりによって、公園内に迎え入れられるような表情をつくる。頭上を覆うような入口の樹木に対してはアップライトを行い、離れたところからも公園の緑が感じられるように演出する。

公園内の街路灯は、まぶしさを感じずあたたかみのある雰囲気を感じられるように、適切な光源に変更したり遮光や減光等を行う。

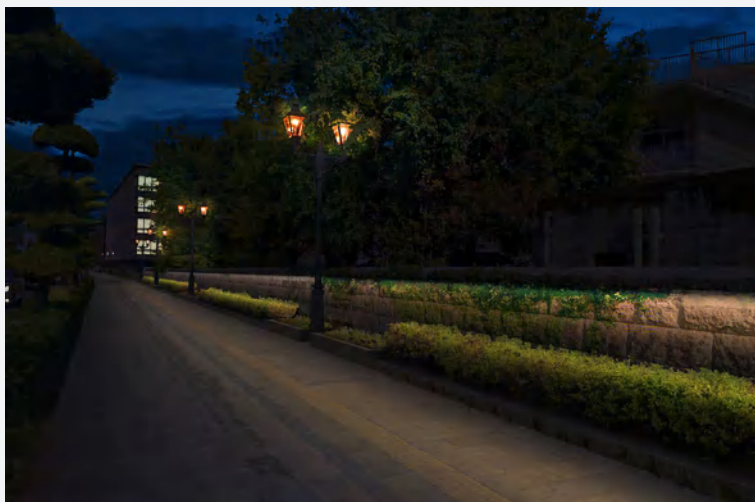
○ 中央公民館前



広場の周りやフォトスポットの植栽内に、下方のみに光を発するシンプルなボラード照明を設けて広場全体の統一感を演出するとともに、光源の存在感を感じさせずに植栽や花々の彩りを優しく照らす。広場を前景として、遠くからも目立つヤシの木のライトアップや、現状の投光器よりも丁寧に計画された小松帯刀像のライトアップが奥に見えることで、まちかどの景色が多層的で印象的なものとなる。

すでにライトアップが行われている中央公民館の周囲は、アプローチ部分に間接照明（手すり照明など）を設けて足元を照らすことで、連続性を高める。

○ 名山小学校前



道に沿って続く石塀に対し、笠木の部分などを利用して間接照明を設ける。下方かつ前方に向けた配光し、石垣だけでなく、下にある植栽帯の花々や歩行空間の路面に光を広げられるよう計画する。

シンプルな照明手法を丁寧におこなうことで、石垣の陰影や植栽の緑による明るさ感が道沿いに続き、ガス灯の明かりが点々とアクセントになって、心地よく歩いていきたくなる景色が生まれる。

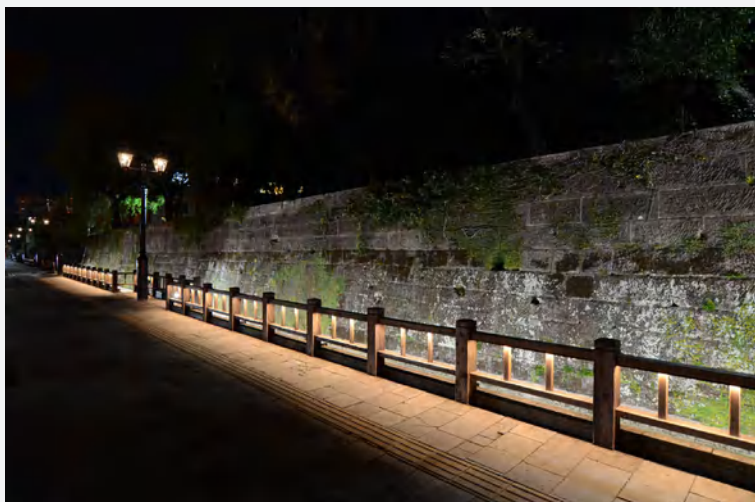
○ 鹿児島市役所本館



建物の形状に合わせ、影が出ないように各層に照明を設ける。壁柱にはアップライトをおこない、土台となる風格を演出する。レリーフに対しては、不自然な陰影が出すぎないように、真下ではなく少し引いた位置からスポットライトを照射して、建物の中央部分で視線を惹きつけるハイライトを計画する。

建物の両翼部の形状も見せるため、角部を投光照明（フラッドライティング）によってやわらかく照らす。また、前景の樹木に対しても、合わせてアップライト等を計画することで、より表情のある大通り沿いの夜景をつくる。

○ 歴史と文化の道（モデル箇所）



実証実験の結果をもとに、石垣へのライトアップと、木柵の手すり照明という、2種の照明要素を計画する。石垣を照らす光は、間接照明とスポットライトを併用し、西南戦争時の銃痕が残る凹凸や植物の緑を、陰影とともに演出する。手すりの照明は路面に十分な照度を与え、連続した光の帯が歩行者の誘導性を高めることで、夜間にも心地よく歩ける街路となる。

また、調色調光タイプの照明器具を用い、季節に応じた色温度による演出や、深夜帯における減光といったオペレーションを可能とする。